牛窪　梧十（うしくぼ　ごじゅう）　書家

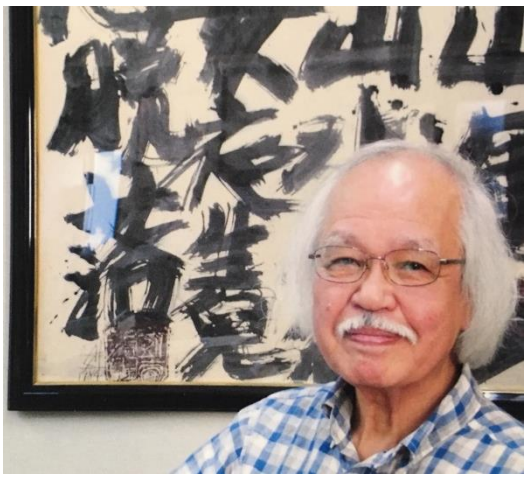
1945（昭和 20）年～

1. 経歴・狭山市とのかかわり

入間郡三芳村で生まれたが、幼少期は静岡県で過ごし、富士山と武蔵野とが心の原風景としてある。埼玉県立川越高校に入学し、書道部で書道にのめり込んでいたが、その中で西川寧先生の「書の変相」という本を読み、多大な影響をうけた。

西川先生が教授であった東京教育大学で書を専攻し、その後西川先生に直接師事する。また早くから興味を持っていた篆刻は、高校の先輩でもあった小林斗盦先生に師事、必要不可欠な文字学は白川静先生の学を独学した。大学卒業後は川越高校、豊岡高校、飯能南高校で２５年間務めて退職。2000 年から大東文化大学書道学科の講師となり、70 歳まで教鞭をとる。結婚を期に 1970 年から狭山市水野に住み、埼玉書道三十人展・埼玉書道展に出品し、書道教室も開いているが、主な活動場所は東京である。夫妻で主宰する成和書会は毎年日本橋の好文画廊で成和書展を開催しているが、漢字五体だけでなく、かな、篆刻もあり、参考品も陳列するなど幅広い展示で好評を得ている。

2. 主な業績

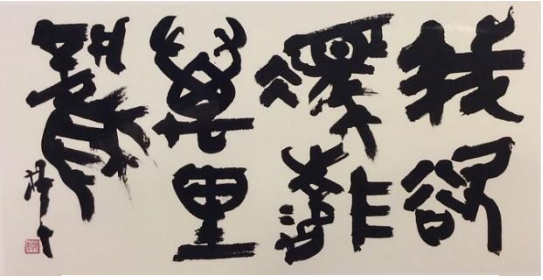


書斎には須田剋太の書も

・早くから多くの著述に関わってきたが、主著は
　1984 年：書学大系＜鄧石如＞
　1987 年：標準篆刻篆書字典　：篆書にしたしむ本
　1994 年：作品に学ぶ墨場必携＜篆書＞
　1998 年：古典の新技法＜六朝楷書＞
　などがあり、現在も版を重ねているものもある。
・作品発表の場としては、謙慎書道会展、読売書法展、日展などで受賞を重ね、役員、審査員も務めている。
・2013 年２月に開催した牛窪梧十書展は初めての個展であったがその質と内容で注目を集めた。
・現在は、日展会員（審査員３回）、読売書法会常任理事・執行役員、謙慎書道会事務局長、全日本書道連盟理事、全国書美術振興会監事であり、成和書会を主宰している。2019 年日展では文部科学大臣賞を受賞。また 2021 年度の日本芸術院賞に選ばれ、同時に恩賜賞も受賞した。

3. 特筆

牛窪氏が書き続ける「金文」は、中国の殷周時代の青銅器の銘文の文字で、現在も発掘が続き研究が進められている。この漢字の最初の姿に魅せられ、白川静の文字学を手がかりに、現代の造形芸術として作品化しようと追及を重ねている。その着実な努力が認められ依頼を受け、高校の授業でも必要と作った標準篆刻篆書字典は、発売後すぐに台湾で海賊版が出されたほど有用で、全国の高校にも配備されている。また「今昔文字鏡」というコンピューターソフト用の篆書約１万字を書いたこともあるという。この頃は、研究と趣味を兼ね蒐集してきた拓本や書籍、古人の書画等機会を得ては公開・展示することも心がけており、科学が進み過ぎた感のある現代社会への違和感を噛みしめながら、人間として大事な忘れ物は無いのかと省みながら悠然と生きていきたいのだと笑う。



我は万里の風に憑陵せんと欲す